

## 編集後記

\*『言語文化』第24号をお届けします。今回も「言語文化」にふさわしい、本学研究所ならではの誌面を提供できたのではないかと思います。貴重な原稿をお寄せいただいた執筆者の皆様、また企画・編集にお力をいただいた方々に改めて御礼申し上げます。

特集の一つである「旅と文学」は港区との共催による「二〇〇六年度後期港区民大学講座」から生まれました。講座は全六回で五百名近くの受講者がありました。残念ながら講演のすべてを掲載できませんでしたが、ここに講師のお名前と演題を記しておきます。川本三郎「房総への旅―東京人にとつての海辺―」、青木剛「夏目漱石の欧州航路―西洋建築との出会い―」、巖谷國士「ノスタルジア―小泉八雲のはるかな旅―」、工藤進「二人のイエズス会神父とヘボン博士」、嶋田彩司「江戸の旅人が連んだ文学」、四方田犬彦「パレスチナへの旅だ」。二つ目の特集としては「弱者とメディア」というテーマで、宇波彰氏と大嶺沙和氏の玉稿を頂きました。バクリ一人芝居「悲観楽観悲運のサ

イド」およびバクリ・シンポジウムは、十二月に開催された公演と映画上映、シンポジウムの成果であり、この注目すべきイヴェントの詳細については四方田氏の解説をご覧ください。

特集、イヴェント関係以外の原稿としては、大和田俊之氏による「ヒスパニック・インヴェイジョン―アメリカ音楽史におけるラテン音楽の系譜」があります。これは公開講座「アメリカ・ポピュラー文化の諸問題」に由来するものです。また、本学英文学科の富山英俊、マイケル・プロンコ両氏の共訳になる、宮沢賢治作品の英語への翻訳という貴重なお仕事を頂き、本研究の歴史ある「宮沢賢治研究」の新たな展開を予感させるものではないでしょうか。

本年度も当研究所では興味深いプログラムが目白押しでした。四月には例年通り各種の読書会が始まり、着実な研究活動が続行中です。六月には「現代トルコの文学と映画」というタイトルで、トルコの日本文化研究家イナン・オネル氏による講演会が開催され、ほかでは聞くことができない貴重な講座となりました。七月には公開講座として詩人の八木幹夫氏による「言葉の問題・翻訳の問題―お

経を現代日本語に訳す過程で―」があり、言葉の宝庫としてのお経という、従来あまり光を当てられないことがなかつたお話が新鮮でした。十月には第六回目となるポエトリ・リーディングが開催され、「現代詩に声を取り戻そう」というタイトルのもと多くの来場者がありました。十一月には本学芸術学科との共催による「モーツアルト生誕二五〇年記念国際シンポジウム―モーツアルトの大衆性」が開催され、国の内外の研究者による研究発表や「古楽器で聴くモーツアルト」など多彩かつ盛大なイヴェントとなりました。十二月には前述のモハマッド・バクリ公演会が開かれ、多くの来場者と多数のメディアの注目を引くところとなりました。公開講座の締めくくりとして「アメリカ・ポピュラー文化の諸問題」というタイトルのもと、大和田俊之氏による「クレオール再考―複数のアメリカ音楽に向けて」、舌津智之氏の「境界の表象・表象の境界―音楽、文学、南西部」を開催できました。

最後に内輪のニュースを一つ、当研究所に長くお勤めの深沢さんが十二月に産休の休暇に入り、後任として小坂暁子さんに仕事を引き継いでもらっています。

深沢さんは二月に長女誕生とのことでおめでとうございます。(岡本昌雄)

\*本号に、二〇〇六年十二月にアートホールを用いて開催されたモハマッド・バクリ氏の公演とシンポジウムの記録を掲載できたことは、この企画に携わった者として、大きな喜びであった。

バクリ氏は一九五三年、イスラエル北部のアル・ビナにパレスチナ人として生を享け、このユダヤ人国家の周縁にあつてつねにきわめて困難な状況を生きてきた芸術家である。彼はテルアヴィヴ大学で最初に演劇を専攻したパレスチナ人であり、一九七〇年代から現在に到るまでイスラエル国内でアラビア語、ヘブライ語の双方を用いて俳優として舞台上に立つてきた。また映画俳優としても国際的な活動を行ない、パレスチナ映画、イスラエル映画のみならず、コスタ・ガブラスやタヴィアーニ兄弟のフィルムにも出演している。ここに収録されたのは、彼の演劇の代表作である『悲観楽観悲運のサイド』(エミール・ハビービ原作)の上演台本であり、その上演の翌日、上映された二本のドキュメンタリーをめぐつてなされたシンポジウムの記録である。シ

ンポジウムに参加してくださった日本女子大の臼杵陽教授、イスラエル・アラブ文化研究家の田浪亜央江氏に感謝したい。またバクリ氏の助手としてともに来日されたラミ・リヴネフ氏にも発言していただいた。あわせて感謝の言葉を申し上げたい。

バクリ氏公演ともある意味で関連している企画であるが、本号には「弱者とメディア」をめぐる二本の論文が掲載されている。一つは哲学者である宇波彰・本学名誉教授の手になる、現代思想における弱者とその言説を主題とした論考である。これは本研究所で二〇〇六年に氏が開講された現代思想のゼミナールでの探求の結果を踏まえて執筆されたものであり、ラカン、ベンヤミン、パースといった二十世紀の知的営為を自在に横断してゆく著者の身振りには矧目すべきところが見受けられる。もうひとつ、大嶺沙和氏による、日本映画におけるオキナワの表象をめぐる論文は、二〇〇五年度芸術学部の大学院に提出された修士論文のある章に、その後加筆改訂を施したものである。十九世紀末にニーチェが強者の哲学を説いたのに対抗して、二十世紀末のイタリアの哲学者ジャンニ・ヴァッ

テイモは弱者の哲学を主張している。身障者から被抑圧エスニック集団、被差別民まで、今日の世界にあつて不当に貶められ、経済的のみならず、文化的にも社会的にも搾取と収奪の対象とされてきた弱者を、はたしてメディアはそれ以上に表象してきたか。いや、そもそもそれ以前に、弱者は表象しうるものでありうるのか。ガヤトリ・スピヴァックが提示したこうした問いかけに、この二論文はそれぞれ、対照的な立場とスタイルから応じているように思われる。ユダヤ人国家イスラエルの内側に住まうパレスチナ人の演劇的表象を考へることも、この今日的な問題体系に大きく関係して行くことだろう。

けだし言語について思考することとは、その言語を行使し、日夜、言表活動を行なっている生きた人間について思考することである。その意味で、今回のこのふたつの企画は、あらかじめ学としての秩序が制度的に定められている、「死体解剖」(澁澤龍彦)じみた知的営為の不毛を超えて、言語文化研究所の本来の姿勢にかなつた探求として成立していることを、ここに確認しておきたい。(四方田犬彦)